

高齢社会をよくする女性の会・大阪



事務局：〒543-0028 大阪市天王寺区小橋町9-13-501（田代方）

Tel/Fax 06-6762-0550

E-mail wabas-osaka@mbm.nifty.com

<http://wabas-osaka.life.coocan.jp/>

第 108 号

2020年9月19日

コロナ禍特集号

今後の生き方や 活動の在り方を考える契機に

代 表 植本 眞砂子

新型コロナウイルス感染拡大は、未だ終息の気配を見せていません。この度、「コロナ禍で想うこと」の寄稿を呼び掛けたところ、25 人の方がそれぞれの暮らしの中で感じたこと、経験したことを寄稿して下さり特集号となりました。

新型コロナウイルスの人への感染は、昨年 11 月に中国で確認され、今年の 9 月 13 日時点で 213 の国・地域に広がり、2,876 万人の感染者、92 万人の死者が確認されるまでに急拡大しました。（日本国内では、76,389 人の感染者、1,460 人の死者）集団免疫を獲得するまでには 2～3 年かかり、第二波・三波と感染を繰り返すということが言われています。この間、様々な情報があふれ、それを正しく選択することの困難も感じました。

コロナパンデミックは、グローバル化による経済的格差が、命の格差ともなっていることも明らかにし、世界の人々の感染克服への支え合いと連帯が必要なことを多くの人々に気づかせました。

4 月の緊急事態宣言であらゆる公的機関の会議室・施設が閉鎖され、当会も総会を书面決議で行い、すべての会議をキャンセルしました。5 月 25 日の解除後は、会議室は定員の半分の利用という制限があり、私たちのような市民運動団体は、会場費が予定より倍に近い負担となり、終息迄の経済的負担に耐えられるか、又、感染対策をしての会議や集会実施の準備への手間・暇を考えると、どうしても活動自粛モードは引き続いてしまう。Zoom での会議も試み、実務的なことは対応できるが、人と人があって心を通い合わせお互いを理解し活動を進めることは、それぞれにとって大きな力です。又、情報機器を使える人との格差も考慮する必要があります。

新型コロナウイルス感染拡大は、改めて今後の私たちの生き方や活動の在り方を立ち止まって考える契機にもなっています。ピンチをチャンスに！乗り切りましょう。

目 次

巻頭言「今後の生き方や活動の在り方を考える契機に」	1
【特集】新型コロナウイルス禍で想うこと（会員寄稿）	
◆ 介護問題に関して	2～ 7
◆ 社会問題に関して	8～13
◆ 暮らしに関して	14～22
アフターコロナをどう生きる？（2020 国際女性年大阪連絡会 8.7 平和集会報告）	23
運営委員会だより	24
インフォメーション	24

介護問題に関して

【特集】 コロナ禍で想うこと

ケアマネとして感じたこと

小堀 直子 60代 大阪市

緊急事態宣言が出された4月初旬から変更を余儀なくされたことを挙げてみます。

◆訪問は玄関先で印鑑をもらうだけに

この事態が理解できていない認知症の方や、耳が遠くマスク越しにしゃべると何を言っているのかわからない、という方には耳元で大きな声で話をするのは変わらず。認知症の方のところは同じように訪問し、状況を把握するため時間をとる必要はありました。

訪問介護や、看護は自粛せず、感染に気を使い、通常どおりでした。デイサービスは回数を減らしたり、時間短縮をするようにという行政からの指導があり、どこのデイも悩みながら実施していました。機能訓練などが取りやめになっていたり、時間短縮し入浴をやめたりしているところもありました。

介護業界はほとんど自粛とは縁遠い状況で、通常の仕事を手洗い、マスク、消毒と気を使っていたり余計な仕事が次々とありました。例えば次のようなことです。

◆小規模の機能訓練型デイサービスでは

“密”になるので「訪問し、理学療法士がリハビリ指導するという形に変更するので『プランの変更をお願いしたい』」と言われ、「大阪市からは『簡単な作業』で担当者会議は必要ない」と言われたが要支援2の方なので、プラン作成の手間は通常書類が6~7種類ほど必要で、とても『簡単な作業』ではありませんでした。

◆「アベノマスク」を配布

4月初め、どこにも売っていない頃だったので喜んで受け取って頂けたのが例の「アベノマスク」で、ある日、郵便小包で事務所に送られてきて、中途半端な数でどうしたものか、と悩

んでいたところ、予防の方は地域包括支援センターから一人一枚配ってほしい、という要請が来た。結局担当する要介護者、要支援者全員に一枚ずつマスクを配りました。でも使っておられるのはほとんど見かけない状態で、果たしてどんな効果があったのか疑問です。忙しい時期で、しかも感染に注意しながら全員にたった1枚の小さなマスクを配る手間は半端なく面倒でした。大したことでないことでも「外出自粛」と言われていた時に、却って訪問しなければいけない仕事が増えるというのは、それも「アベノマスク」1枚配るために。全員に配るのはばかげているとは思えません。今回もまた足りないマスクが送られて来ました。

◆特例加算は問題

デイサービスで「割り増し請求」をすることで、この間のコロナ感染防止の苦労に報いるという厚労省お墨付きの『不正請求』があります。デイサービスは利用時間と介護度で点数が決まっているが、週2回以上利用している人は月4回まで、週1回の方は月2回、2段階時間を増やして割り増し請求できるという支援策です。回数を多く使っている利用者やほかのサービスをいっぱい使っていて、割り増しをすれば自費が発生する人は割り増し請求しないとか、介護保険外の個人負担分(昼食代やおやつ、コーヒー代など)は割引するなど、デイサービスによってまちまちで請求時にやり取りして確認しないと国保連に請求がうまくできなくなります。知人は事業所が連絡なしだったので、請求間違いで返戻となり、再請求しないといけなくて余分な仕事が増えたと嘆いていました。

行政に言いたい

中務 公子 70代 豊中市

私は、「介護保険とよなか市民会議」という市民団体の事務局を担っております。新型コロナウイルス禍に際して、豊中市とやり取りしたことを踏まえ、以下のことを実現してほしいと強く思っています。

◆情報公開

住んでいる市町村毎に現在の感染者と感染経路を知らせてほしい。介護事業や医療機関でクラスター発生した場合、どの範囲で追加PCR検査を何件行っているかを知らせてほしい。自分に関係するかを判断するために必要です。市町村のホームページに載せるべき。

◆PCR検査を広く実施

感染を防止するためには、ここで感染してはいけなと考える人にPCR検査を健康保険で受けることができるようにするべきです(自己負担あり)。仕事、移動、個人の都合で人に感染させないために、自らをチェックできるためにです。

◆介護者がコロナに感染した場合の対応

(感染の疑いも含む)

在宅で高齢者を介護している介護者が今不安に思っていることは、自分が感染(疑い)した場合、要介護者を速やかに遠ざけねばならない事です。緊急に濃厚接触者の可能性のある要

介護者を預ける場合は市町村で用意されていないのです。感染防備策を完全に配備した場所を行政として設定されるべきでしょう。

◆介護事業所の休止についての対応

介護事業所の職員や利用者が感染する例が多く報告されています。その場合、介護事業所の休止となります。休止できない入居施設では応援の職員が要ります。一事業所では対応が困難になることを想定して、事業所間で協力できる体制を作っておかなくてはなりません。すでにあるのかどうかさえ、市民は知らされていません。

デイや訪問サービスが休止となれば、今まで利用していた方は代替のサービスが必要となります。しかし、事業所自身やケアマネジャーが、代替をさがすことは大変困難になる場合も予想されます。平時から代替候補を用意しておく構えが、事業所やケアマネジャーに必要です。保険者である市町村が平時から代替候補を、各介護事業所に用意するよう指導してほしい。

入院・手術と、退院後の“コロナ”づけの日々

会員 70代 大阪市

◆報道で感じた恐怖

昨年12月初めから2月初めまで検査、手術で入院していた。コロナを知ったのは退院後である。クルーズ船乗客の感染、中国・武漢の都市封鎖等次々飛び込んでくるニュースは例年の流感などとは異なり、かつてのサーズ、マーズのような致死性の高い感染症らしい。当初段階では高熱(37.5度)が4日続かないとPCR検査を受けられない、つまり咳が出て高熱があ

っても治療を受けることが出来ないという治療体制の大枠があった。しかも治療の鍵を握るのは「保健所」。疑いのある人は保健所に連絡して、PCR検査を受けなければ前に進めない。しかし、ここに連絡しても電話は繋がらない。保健所がクラスター追跡を行っていて、電話はパンク寸前。電話はずっと話し中状態でPCR検査の予約が取れない状態であるとマスコミは報道する。「ああ、私はこれで死ぬかも」と

とっさに感じてしまう位の強い恐怖が一。

◆要介護者として

脊柱管狭窄症で救急車で緊急入院で差し歯の治療は中断のママ、さらに隣の歯にも孔があく。しかし、未だにコロナが恐ろしく治療に行けない状態。前歯だからまさに歯抜けの婆さん。おまけに奥歯も歯槽膿漏で時々出血。

要介護 2 で週 1 回ヘルパーさんに掃除を、週 2 回訪問リハビリが 7・8 月は 1 回になり終了。引き続き 9 月からはリハ特化のデイに週 2 回通うことにしようと思っている。循環器内科、整形外科への通院以外には近くのコンビニ以外に出歩かない生活をしているのに、怖いことは怖い。

しかし、引きこもりは筋肉の衰えが進む。やはり外に出て、器械を使った運動をと考えている。リハビリ特化型の通所デイサービスがある事を今回初めて知った。

◆介護保険の事を知らない人が多いことに驚く

介護保険制度が開始される以前から「高齢社会をよくする女性の会」で勉強し始め、20 数年経つが、入院してみて、制度の事をよく知ら

ない方が多い事に驚いている。勿論名称位は知っているし、保険料は払っている(らしい)位は知っていても、いざ使う段になるとその入りの手続きを知らない人が意外という。

病院との連携が言われ、病院の食事室の壁には「地域包括ケア」の大きな文字があるが、退院間際の人に「介護保険」の手続きを知らない人がいて、こちらの方が慌てる事が 2 度や 3 度ではなかった。せめてナースステーションのカウンターに分かりやすいガイダンスのパンフレットが準備されていたら、病院には地域連携室といって治療以外に退院後の生活全般の相談に応じる部署があるので、ここを上手く活用するようなガイドを治療にあたる医師、看護師などが行い、退院後の生活がスムーズに行えるように入院中に準備するように出来ないものか。

介護と医療の連携は「一人暮らし」が増え、入院期間が短くなり、待たなしで始まる退院後の生活を支える介護のケアにスムーズに進められる事が求められている。病院による差があった。

コロナ禍での母との別れ～介護施設での感染症対策を考える

植本 眞砂子 70 代 大阪市

7 月 31 日に母は、入所している特別養護老人ホームで旅立った。「おやすみなさい」とヘルパーさんの手を握って挨拶をして眠り、目覚めなかったと明け方知らせを受けた。93 歳、老衰の大往生だった。

2 月に新型コロナウイルス感染防止のため政府の「不要不急」の外出自粛要請があったが、特養に入所中の母と妹(要支援 2 で週 2 回デイケア、週 3 回ホームヘルプサービス)を週 1 回訪問し、話し相手と家事支援をしていた私は、無症状の感染者かもという自覚をもって注意深く行動はしたが、実家と特養通いを辞めるのは困難だった。

◆特養での面会中止への対策は

安倍首相の唐突な全国一斉休校要請直前の

2 月 26 日、母が入所中の特養より「面会中止」の連絡があり、以後、着替えや慰めに再整理したアルバムや母の日のお花などを届けても入り口で介護士が預かる状態に。同じ建物 1 階のデイサービスはほぼ通常通り実施。面会中止は、6 月 22 日まで約 4 か月続き、その後は、予約制で相談室での 10 分程度の面会に。何度か特養にスマホを利用したテレビ電話対応や ZOOM 等での会話をと要望したが、無理と断られた。(5 月 15 日付の「高齢者施設等におけるオンラインでの面会の実施について」の厚生労働省の事務連絡は、遅すぎた。殆どの特養は、機材と人手の問題等で直ちに対応できず)毎週詰め所に電話し、電話口まで連れてきてもらったの短い会話のみで、認知機能と運動機能の低

下が心配だった。

たまたま、母は腎臓の感染症で5月と6月に入・退院を繰り返し、入院手続きや主治医からの説明時に久しぶりに会うことが出来て本人は喜んでいて。母は、退院後も発熱が断続的にあり、食も細くなってきたので、特養の医師と話し合い、「看取り対応」の書類を作成した。その後は、予約をすれば短時間だが本人の居室での面会が可能となり、週に何度か会うことが出来、亡くなる前々日にも会話ができた。

◆感染症対策でも人材不足の解消がキモ

母が入院した病院では、「面会禁止」としつ

つ短時間なら家族が部屋で本人と話すことが許されたのに、特養では、玄関から中に入れてくれない状態が続いた。この差は、病院では、入り口での体温チェックと問診・手指消毒、ナースステーションでの面会把握などで感染症対策を講じていたが、特養では、このような対応が取れていない（取れない）、万が一の時の感染症対策としての職員のスキルが確立していない、防護服を含めた器材が不十分などが考えられる。医療と介護の連携の上でも介護施設の感染症対策のスキルアップと人材確保の重要性を実感した。

本来活動ができない！

長福 洋子 60代 大阪市

◆利用者延べ7,000人のサロンが休止

私が25年前から活動してきた地域でのつながり作り活動が、今年3月より、全くできなくなってしまった。残念、悔しい、を乗り越えて、新型コロナの終息が見通せない現在、無力感さえ覚える今日この頃です。

特に、年間の利用者が、延べ7,000人を超え、参加活動をしているボランティアも年間延べ800人というサロン活動が休止になり、地域の居場所、気軽に立ち寄れて顔見知りができる、人と人とのつながり作りの場がなくなってしまいました。主に高齢者中心の利用ですが、親子が集う絵本の読み聞かせのお話し会や、人気の歌声喫茶、健康体操など、毎日たくさんの地域の方々が集うサロンです。

◆ニーズの高い「食堂」を始めたばかり・・・

今年からはニーズの高いみんな食堂として「夜ごはん食堂」も始めた矢先だったのです。

サロンを閉館して6ヶ月。おしゃべり中心の活動ですから、ずっと閉めざるをえません。毎日のように来ておられた高齢者の方たちは行くところがない、おしゃべりできない、いつ開けるのか？と、外で会うたびに言われます。社協や包括からも、いつ開けるの？と訊かれます。ボランティアの皆さんも活動の生きがい失って元気がなくなってきました。

新型コロナ禍によって断ち切られた地域のつながりが、一日も早く復活できることを願ってやみません。

地域サロンは何よりものフレイル予防

国立長寿医療研究センターは5月28日に「新型コロナウイルスへの感染を防止するために外出を控える高齢者が増え、結果として身体状況にかかわらず高齢者の身体活動量は3割も減少している」との調査結果を公表した。これは新型コロナウイルス感染症の収束後に「要介護状態に陥る高齢者が増加する」ことにつながりかねず、テレビやインターネットなどを通じて、屋内での運動・自宅周辺でのウォーキングを呼び掛け「身体活動を安全に行うことにより心身機能を保つ必要がある」と述べている。

東京都健康長寿医療センター研究所が緊急事態宣言の解除に伴い再開されるサロン等の「通いの場×新型コロナウイルス対策ガイド」（2020.6.22 更新）、「概要版チェックリスト」を発行した。各自自治体や社会福祉協議会はこれを基に各地で再開対策を行っている。

介護事業所の現場から

坂口 真紀 30 代 富田林市

◆介護現場は 3 密が避けられない

介護の現場では、学校の一斉休校が始まった頃より、デイサービスの利用自粛者が出始める。テレビを付ければ、コロナ関連の話題ばかり。感染すれば重症化するリスクが高い高齢者の不安は日に日に増していくのを事業所内で感じていた。その不安は、スタッフも同じで、私も含め、若い職員は「無症状で感染させてしまったら」70 代職員は「自分も感染したら」という思いの中、事業所内の緊張感が高まっていく。みんなで考え、可能な限りの感染予防策に努めるが、耳が遠い方には、近距離での会話、認知症の方にマスクを付けてもらうことの難しさ、トイレ介助、移乗など密接な関わりは避けられない。

しかし、事業所と外部との距離は確実に遠く、他の事業所と連絡を取ることすら躊躇する。緊急事態宣言が出された 4 月の利用者は、1 日 1~2 人の日も多くあった。

◆「廃業」のニュース*に不安が募る

感染の不安と経営面での不安を感じる中、同業者の廃業の連絡が立て続けに入り、一気に事業所内の士気を下げた。他人事ではないとみんなが感じていた。うちの事業所が閉まれば、独居の方や認知症の方、自宅での入浴が困難な方など、サービスなしでは生活出来ない方にとっては、更なる混乱を招くことになる。もう少し踏ん張ろうと。

老人福祉・介護事業の倒産状況

※東京商工リサーチは「2020 年上半期『老人福祉・介護事業』の倒産状況」を 7 月 7 日に発表した。1~6 月の倒産件数は 58 件と、19 年同期の 55 件を上回り最多記録を更新。開設してまだ間もない小規模事業者が大半を占め、競争の激しいデイサービスやショートステイの通所・短期入所介護事業の倒産数が増えている。

◆高齢者の機能低下が心配

緊急事態宣言が解除され、6 月より徐々に利用を再開される方が増えはじめたが、認知や身体面の機能低下が見られる。未だ自粛されたままの方のことが気がかりで、こまめに連絡を入れる。家族より利用を控えるように言われているとの返答に積極的に利用を促すことも出来ず、歯がゆさだけが残る。出来る限り、考えられる限りの安心材料をみんなで考え作る。当然、経費はかさんでいく。市中感染が広がる今、事業所内で…、スタッフが…、等様々な想定しておかなくてはいけない。

◆コロナ特例加算で現場は…

6 月より始まった、通所介護のコロナ特例加算。現場では混乱が起きた。混乱や業務負担が起き、更には、利用者全員に適應できるわけではなく、利用者負担も増える。

同業の事業所間で対応策や状況などの情報交換をすることが、現場の安心材料の一つになる。先が見えない中でも、先のことを想定し、周りを見ながら、今、必要なこと、求められていることを見てやっていく。

介護保険のこれからは？

介護保険の創設から 20 年。コロナ禍であぶり出された介護現場の“もろさ”は、介護保険制度そのものが抱える問題即ち「財源」と「人材」不足を顕在化させた。

高齢化率は、創設時 17.4%が 28.9%に、介護保険の総費用（自己負担分含む）は 3 倍超の 11.7 兆円に。65 歳以上の保険料の全国平均も月 5,869 円と倍増。介護保険財政逼迫の中、介護報酬も抑え込まれ、介護職の低賃金と人手不足が慢性化。

2021 年 4 月からの第 8 期介護保険事業計画に「災害や感染症対策にかかる体制整備」が新設される。秋以降各自治体で、審議会やパブリックコメントが実施される。この間の経験を踏まえて、居住自治体の「計画」づくりに参画しよう。

気持ちも予定も「掻き乱された」けれど 前を向いて生きていくしかない！

足立 須香 60代 大阪市

◆絶対、感染できない！そう思った

要介護 5 の父親を週の半分ずつ自宅とショートステイで介護している。もし、92歳の父が感染したら、次に会えるのはお骨になって帰ってきたときか… 私が、感染したら、父の世話は？ 施設は預かってくれるのか？ 買い物はどうするのか？ オムツも食料品も買いだめしておかなくては…

私が家で倒れたらどうするのか？ 二日姿を見なかったら、いや一日でも SNS に投稿しなかったら、家にようすを見に来てほしいと頼んでおかなくては…

何より今回一番困ったのは、助けも求められないということ。身内にも友達にもすぐに来てほしいと求められないこと。行政は、頼れるのか、守ってくれるのか、考えたら考えるほど不安が増す。

この間、ショートステイも週2回の訪問リハビリも途切れることがなかったのはありがたかった。

しかし、このいつもどおりの日々がある日突然ストップするかも、今もハラハラドキドキの毎日だが、笑顔で応対してくれるが、最前線で働いている人たちの不安や苦労（マスクも自分で用意しなければならないなど…）は、大変なものだと思う。

えらいことになったものだ、力を合わせて乗り越えていこうと呼びかけられないのだから…。

◆今回の騒動で学んだこと

運営している一般社団法人「ひとことつむぐ」のさまざまな活動もほぼ中止になってしまった。2週間に一度開いていた Yosuga 食堂（子ども食堂）も一旦は停止した。

しかし、学校が休校になったので、こんな時こそ子どもたちを支援しようと週2回ランチを提供することを決めた。三密を避けて、感染防止対策をとってしばらく実施したが、自粛要請でやむを得ず、中止する決断をした。

学校帰りの子どもたちの姿もなく、車の通行量や人通りも減ってしまった。DVや児童虐待が増えて



いるというニュースや SNS の投稿を読むたびに、私たちができることはないかと考えた。子どもたちとつながることができて、保護者の支援になることは、やはり「食」を通すことだとスタッフみんなで一致。

6月から、週1回夕方に Yosuga 弁当を地元の小中学生を対象に配布することにした。助成金の申請も通ったので、無料で30食、食材も吟味したすべて手作り。スタッフ5名で10月まで実施する。子どもたちとは、弁当を渡すときのわずかなやりとりだが、この時間を大切にしていきたい。（運営資金が集まらないのは苦しいが…）今後は、地域対象で少人数（5名以下）の学習会などの実施を考えている。

【特集】 コロナ禍で想うこと

社会問題に関して

安楽死の議論が高まる・・・？

会員 70 代 枚方市

コロナによる莫大な財政支出。今後、医療・介護への跳ね返りがおそろしい。今でも国は社会保障費の増大でつぶれそうなのですから。

安楽死の議論が高まるのではないかと心配しています。「死にたい人はさっさと死んで下さい」とね。高齢者は軽くあしらわれそうな気がします。

医療分野で「80 歳以上は積極的な医療はするな」と言っていると聞きました。これはコロナに関係なく、以前から聞いていました。80 歳以上は生産性がないと、思っているのですね。悲しいことです。世代間の対立が深まらないように願うばかりです。

コロナ禍の中、二つのニュースにぞっとした

熊野 以素 70 代 豊中市

◆政治が「命」を選択する？

れいわ新選組の公認候補が「高齢者を長生きさせなくてはいけないという政策をとっていると若者たちの時間の使い方の問題になる」などと主張。「命、選別しないと駄目だ」と思う。その選択が政治。選択するのであればもちろん高齢の方から逝ってもらうしかない」と述べて。

これについてトリアージを引き合いにして容認する意見もある。多くの負傷者重症者がいる中で、救命できる数は限られている。誰を救うか選ばざるを得ない。これがトリアージで大災害時などに突き付けられる問題である。救命側の人間は苦渋の選択をする。涙を流して「お父さんの命は諦めてください」と医師が言う。コロナ禍のイタリアなどであったという。

しかし、トリアージと命の選別を政治がするというのは全く違う次元である。人の命をあらかじめ年歳でわけ、救われるべき命とそうでない命を分けるというのは、人の命に価値をつける論理である。これが肯定されれば

障害を持つ人と持たない人との命の選別も、自国民と他国民の命の選別も当然ということになる。「ナチス」の論理の採用である。「政治が行う」というのはそういうことなのである。

◆「譲る(ゆずる)カード」？

石蔵文信氏（大阪大学人間科学研究科未来共創センター招聘教授・医師）が「『高齢者が万が一の時、高度医療を若者に譲るという意志』を示すことができる『譲カード』を作成しました」。このカードの普及を図ろうとすると、同調圧力の強い日本ではこのようなカードが流行れば、多くの高齢者は心ならずもサインし「コロナにかかったら死ぬしかない」ということになる。かつて若者が特攻隊に志願せざるを得なかったように。

これらの背景にあるのは、経済的価値を生み出さない高齢者＝多くの診察券を持ち、薬を飲み、働きもせず、食べるばかりの私自身＝は社会のお荷物、「若者に席を譲れ」という声である。

高齢者施設は河川敷近くに作られることが多いという。万一の場合真っ先に犠牲になる

場所に・・・

「命の選択」論議は経済最優先の政権にとって都合が良い。「善意」に騙されてはいけない。今は政権が推進してきた保健所縮小や病

院再編・統廃合が医療不足を生んでいるという事実を指摘し「公衆衛生・医療の充実こそが政治の役割」だと叫ぶべき時である。

不安を解消し安心の保障を！

山中 理恵子 60代 堺市

毎日、拭うことができない不安を感じている。「感染すること」も「感染させること」にも気を配らねばならない、しかも防止への具体的手立ても提示されず、巣ごもり状態の日々に神経がまいってしまう。加えて、毎日増え続ける「感染者数」の発表と医療機関の逼迫状況のマスコミによるアナウンス等、解答のない問題を解かされている気分になる。この事態に至って、国のリーダーの顔が見えず、まして我々へのメッセージ1つない。結局、自宅での巣ごもり生活のみが防衛策だとあきらめてしまう。国や自治体には以下の「不安」を解消し「安心」を保障する策を求めたい。

◆必須は、具体的な対応策の提示

不安は、「感染しているかもしれない」初期時点から「感染が疑われるときの対処」「診断ができる医療機関の場所」「診断が出された後の身の処し方」「療養できる場所の可否」、すなわち工程が全くわからないことから派生している。つまり、「感染しても必ず手当の仕組みがある」ことが必須だと思う。人は、今後の予測ができ、対応策が具体的に明示されることで不安を払拭できる。つまり、「正しく恐れる」心づもりができるのではないかな。

◆検査の拡大と治療機関の拡充を！

「安心」を担保する1つの方法は、検査の拡大と治療機関の拡充だと思う。「広範囲に検査をすれば、医療機関が破綻する」との趣旨

で検査が受けにくい状況を引きずっているが、本末転倒だ。検査を拡大して感染者が増えても耐えうる医療体制をつくるのが政治の任務であるべきだ。検査体制を拡大・医療体制を強化し「安心」を実感できる仕組みを至急に構築すべきである。また、マスコミも具体的解決策がないにも関わらず「不安」を煽るだけの情報提示は慎しんでほしい。

日本の検査数は欧米に見劣りする
1000人あたりの検査数



(注) 1日あたり、7日間移動平均、国によって調査方法が異なる
(出所) アワー・ワールド・イン・データ

2020.9.4 日本経済新聞電子版より

あたりまえの「労働権」を掲げて

伍賀 偕子 70 代 高槻市

コロナ危機は自然現象ではなく、新自由主義にもとづく、公的医療の貧弱さと社会的不平等が事態を深刻化させているという想いを日々強くしている。ここでは、ライフワークとして長年関わってきた「働く権利」に焦点を絞って、危惧や不安を克服するためのつづきと願いを述べたい。

★コロナ危機の中で、「エッセンシャルワーク」の重要性がクローズアップされるようになった。それは、医療、介護、教育、清掃、農業、小売業、輸送業など、私たちが基本的な日常生活をおくる上で必要不可欠な労働とされ、その多くは女性によって担われていることも明らかになってきた。しかし、その社会的な重要性が注目されるようになったとは言え、低賃金や雇用の不安定さはいくつもの調査で明らかである。にもかかわらず、7 月に中央最低賃金審議会（厚労省の諮問機関）は 2020 年度の地域最低賃金は「据え置き」の答申を決めた。なぜなのか?! エッセンシャルワーカーに対して、あたりまえに暮らせる

賃上げと「危険手当」新設、健康に働ける人員補充こそが求められている事態なのに・・・

★コロナ危機による解雇も、ユニオンの労働相談に日々寄せられている。「非常事態なのだから」やむを得ないのか?! そんなことはない。イタリアでは、3 大労組が共同ゼネストを構えて、「コロナ禍での解雇禁止」法制を導入させている。その影響はスペインやアルゼンチンにも波及。そして韓国でも、2 大労組が要求してたたかっている。日本でも、ひるむことなく、基本的な要求として掲げ、横断的なたたかいを!

★「在宅テレワーク」が加速している。その実態は? 私たちが反対してきた、高度プロフェッショナル制度や裁量労働制の拡大など、残業代ゼロを加速させ、過労死の温床となるのでは? もっと恐れるのは、雇用契約を破棄して、請負契約へ加速させ、労働法適用なしの社会を狙っているのでは?! 鳴り物入りで提唱されてきた「働き方改革」とは?・・・

コロナ禍に直撃される女性、非正規労働者

女性の雇用者全体（季節調整値）は 7 月に 2,663 万人となり、2019 年末から 3.2%（87 万人）減った。男性は 0.8%（26 万人）減と減り方は全く異なる。「リーマン危機」時の『男性不況』とは逆。これは、女性の多い宿泊や飲食、小売りなどの業種が打撃を受け、7 カ月間で 87 万人の雇用が失われた。外出自粛や営業時間短縮に苦しんできた業種で、特に女性の落ち込みが大きい。（総務省労働力調査）

前年同期からの変化を 4～7 月の平均でみると女性は宿泊・飲食で 28 万人減、生活・娯楽で 14 万人減、卸・小売りで 11 万人減となった。男性の減少はそれぞれ 10 万人以下。これらの業種は非正規の女性が多く、雇用調整の対象になったことが顕著。

介護サービス職員の有効求人倍率をみると、施設介護職員と比較して、訪問介護員の有効求人倍率が高くなっており、2019 年度時点で 15.03 倍、施設介護職員は 4.31 倍。

正規職員の平均月収は、訪問介護員 198,732 円、看護職員 266,909 円、介護職員 202,145 円、生活相談員 219,502 円、介護支援専門員 237,514 円、PT・OT・ST 等 266,322 円となっている。ヘルパーは非正規が多く、60 歳以上が 39.2%を占め、70 歳以上は全体の 10.5%と 1 割を超えた。

今後、歳を重ねてリタイアするヘルパーが一段と増加していくことが懸念される。

コロナ禍から厳しい未来を考える

福井 英夫 60代 大阪市

◆天神祭が奪われた夏

天神祭の渡御行列が行われず、生まれて初めての夏。例年、私が暮らすまちでは、6月初旬に開く町内会で日程調整をして、初穂料を集め、旗立て、7月20日過ぎの天満宮内の詰所設営と渡御コースのしめ縄張り、24日早朝の鉾流し神事、25日の本宮、26日の後片付けと行事が続きます。でも今年は、何もない……。太鼓の響き、傘踊りの笛の音、大阪締め勇ましい声が聞こえない、のんびんだらりとした時間が続きました。

◆納得できない対策が続く

1月後半に国内初の感染者が報じられたときは、こんなに長期間、私たちの生活に影を落とすとは予想していませんでした。この間の政府の動きは、3月始めの小中学校の休校要請、4月1日のいわゆるアベノマスク配布発表、定額給付金の変更、7月のGOTOキャンペーン、増えないPCR検査数などなど。

宣言をして要請をするけれど、強制力がなく従うか従わないかは個人の判断に委ねられているのに、正しく判断するために必要な適時適切な情報が乏しく、補償も少なく遅い。判断を個人に委ねているので政府の要請に従わない人を攻撃する「自粛警察」が現れる。これまで「その通り！」と感じられる対策は、ほとんどありませんでした。

◆いずれ終わるコロナ禍

でも、先が見えないように思ってしまうコロナ禍もワクチンと治療方法が開発されれば、いずれ終焉の日を迎えます。

しかし高齢化と人口減少は、確実に進行し、樋口恵子さんの言われる「ヨタヘロ期」を迎える人、そして亡くなる人が激増します。そんな人たちは、どこで暮らし誰に支えられるのでしょうか？ 私たちが経験したことがないという意味では、コロナ禍と同じです。科学的根拠より選挙対策を優先しているのでは、と感じられる政府は、少子高齢化に対して「なるほど！」という政策を進めるのでしょうか。また、様々なコロナ対策を借金で賄い、その返済のために社会保障がこれまで以上に削減されることも予想されます。

◆終わりのない少子高齢化

私たちは、コロナ禍を教訓にこれからの日本社会に大きな影を落とす少子高齢化に立ち向かうために正しい情報を集め、想像力を存分に働かせなければなりません。そして自分のできることに取り組む（自助）と共に、周りの人を巻き込み、みんなで知恵を出し合わなければなりません（互助）。さらに科学的な見通しのもとで責任を持った政策（公助）を展開する頼り甲斐ある政府を創る努力も続けなければならないとコロナ禍の中で改めて想っています。

教育の場での気がかり

会員 50代 茨木市

専門職を養成する教育機関に勤務しているが、新学期が始まってすぐに授業ができなくなり、リモート授業の準備は慣れないことが多く、例年より時間が必要であった。新入生

の中には自宅にPCやWi-Fiの設置等がない学生もいて、教える側も教わる側も四苦八苦の状況に混乱した。また、まだ準備が完了していない学生がいる。

通年、事前課題を使用して、グループで意見を交換し、互恵的な相互交流による授業を行っている。しかし、今年はグループワークで自分の考えの不足に気づくことで、考えを補うプロセスを経験させられず、個人ワークが中心となった学習環境で、学習を深めることができたのかと不安を感じている。さらに、対面授業では確認できていた学生の態度や表情を直に把握できないこともあり、学生の学習内容を担保できたのか、また、施設側の理

由によって実習期間が短縮されたことから、専門職としての必要な知識や技術を理解できるのかを心配している。(この状況がいつまで続くのか、正直とても心配である)

今年の後期は夏休みが短縮されて、9 月に始まる。この後期に向けて、さらに今年 1 年が学生にとって、不利益な経験とならないように計画し、工夫が必要である。そのために新たな挑戦と更なる研鑽に努めていかなければならない。

全国一斉休校で失われたものは・・・

野村 生代 50 代 枚方市

◆教育に政治が介入してよいのか

2 月 27 日(木)夕方、突然安倍首相が 3 月 2 日(月)から学校の一斉休校の要請を行ったニュースが流れました。ちょうど教職員組合にいたので、不安な気持ちがすぐに拡がりました。でも、安倍首相には何の権限もないはず、それぞれ自治体の教育委員会が判断することだから…と、その不安を消すために、その言葉をお互い共有していました。

しかし、翌日午後、枚方市議会では代表者会議が開かれ、教育長から 3 月 2 日から休校することが告げられました。この対応は、自治体によって異なる部分があり、休校するまで 2～3 日余裕があった自治体、また、枚方市のように首相の要請通りに行ったところもありましたが、結果、全国で小・中・高及び支援学校のほぼ 99%が休校したと聞いています。いつから、政治は教育に介入してよいことになったのでしょうか。特に安倍首相の要請には、何の法的根拠も科学的根拠もなかったのです。

枚方市でも最終判断は、市長が本部長を務める災害対策本部で決定されました。新学年を迎える 4 月 7 日には、緊急事態宣言が発令され、結局 5 月末まで一斉休校は続き、子どもたちから学ぶ権利は奪われ、子どもたちと

学校とのつながりが切れていた状況であったと思います。

◆子どもたちにとって今必要なことは…

文科省は、GIGA スクール構想を前倒しで予算化し、本市でも、ICT 機器等整備、児童・生徒 1 人にタブレット 1 台等、オンライン授業等に向けて事業整備が進んでいます。今回オンラインによって、学校に行けなくても学校とつながることができることは確認でき、それはそれで新しい取り組みにつながっていると思います。枚方市も今年度中にタブレットを利用する学習が始まることになります。あくまでもツールであり、一人ひとりに必要かたちで有効活用ができることを願っています。

教育委員会では、3 ヶ月の空白が子どもたちにとってどうだったのか、を検証しているのか、見えてきません。学力補償のことばかりが取りざたされていますが、コロナ禍下で見えてきたこともあると思います。さらに多忙化となっている学校現場です。このような時だからこそ、本来授業とは、学校生活とはどういうものであるのか、失われた 4 月からの新しい仲間との集団での学び・活動についても、考えなければならないのではないでし

ようか。その責務は、政府にも、そして主体的に考え判断することを放棄した自治体・教

育委員会にもあると思います。

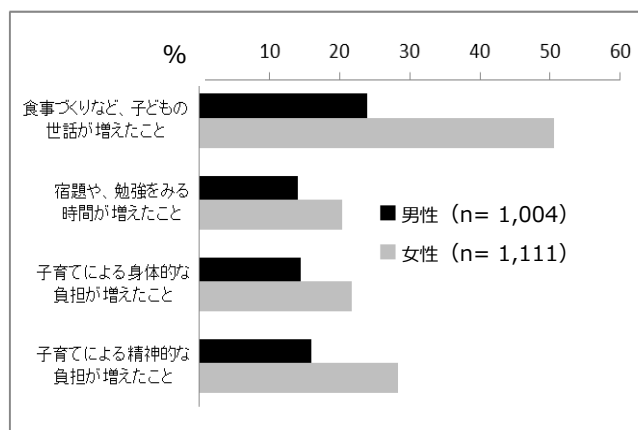
緊急事態宣言下における夫婦の家事・育児分担

(出所：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング)

一斉休校時の「子育てに関して困っていること」は、右のグラフの4つの項目全てで女性の回答割合が男性のそれを上回っている。特に「食事づくりなど、子どもの世話が aumentado こと」の回答割合は、男女間で2倍の差となっている。「家庭の学校化」によって「宿題や勉強を見る時間が増えたこと」が負担となっている。

このように、女性の自粛生活における家事・育児の負担感が大きく、新型コロナウイルス感染拡大後に子育てに関する女性の負担自体が増大している。

新型コロナウイルス感染防止のための自粛等により、子育てに関して困っていること



コロナ禍での「電話相談」

Y.K 80代 堺市

私は高齢者で現在は相談業務はしていないが、3種類の電話を受けた。かつて相談をした時の電話番号を記録しておられて、思い切ってかけましたとのこと。「どうしても話したいときはお聴きしますよ」と言い、内容に合致すると思われる相談機関の情報提供を行った。

☎相談 ① 自己中心的な夫に腹が立つ

結婚して6年目。夫婦共働きで2児を育てている。コロナ禍で夫が失業してしまった。5月頃から夫婦関係が悪化した。何とか話し合いをしようと努力するも、夫はすぐ逃げてしまう。挙句の果てに、実家に帰ったまま戻ってこない。更に、私が電話しても出てくれず困っている。悔しくってたまらない。

夫はひとり息子で母親の自慢の存在である。私たちは恋愛結婚で最初からご両親には反対されていた。理由は「両親と同居すること」だった。当時、ご両親はお元気であったため、「将来何かが起これば同居してもいい」と言った。また、私の仕事が上手くいっており充実していた。

ただ、私の家庭は父親が癌で突然死して、

母親が飲食業で働いていた。結婚費用は私の貯金がわずかしかなかった。夫は「大丈夫だ」と言って、実家から結婚費用を出してもらっている。

夫は職場の人間関係がうまくいかず、上司や同僚とけんかをして1回失業している。今回も仕事のやり方で上司とトラブル、自分から辞めている。今、子供たちは元気よく保育園に行っている。私もなんとか頑張っている。友人に相談したら「自分勝手な男性などあきらめて、別れた方がいい」と。また、「子どもたちは大きくなればあなたの事を分かってくれるから、今を大切に乗り切りましょう。私たちが出来る事はお手伝いします」と親切に言ってくれている。本当に友達はい

い。(後日、女性弁護士さんと会い「離婚」の方向性で話し合っている。相談者の辛く、苦

しい情けない状況をよく理解してくれて、助けられてよかった事を報告された。)

☎相談 ② 「望まない妊娠」で失敗 (結婚して、一児を育てている女性の電話)

コロナ禍で夫は自宅で仕事をする事が多くなり、夫婦関係が密になった。気付いた時は妊娠 2 か月になっていた。私は仕事に慣れて、現場の責任者として充実している。だから 2 人目を産むことは考えたくない。夫は「君が決めたらいい」と。仕方なく婦人科を受診して「中絶手術」を受けた。その後、体調が悪く不眠とうつ症状で起きられず、仕事は残

念ながら辞めた。今は心療内科で治療中である。夫は自分の要求ばかり求めて、私の辛く苦しい気持ちを受け止めてくれない。知人から、「性行為の後すぐ避妊薬を服用したらいい」と聞いた。早速薬局に行った。すると「医師の処方箋が無いと売れない」と断られた。間違っではないが、何か悔しくて泣いてしまった。

☎相談 ③ 「性暴力」十代の悩み

コロナ禍で不登校になり、自宅で過ごしている。2 か月後ストレスが溜まり、仕方なく友人(男子生徒)にメールした。彼は私のことをよく理解してくれてデートした。デートは楽しく、あっという間に過ぎた。のどが渇き彼の家に誘われて行き、ジュースを飲んだ。彼からSEXを望まれて、つい許してしまった。それから3か月後産婦人科受診して妊娠を知った。そして、「今後のことを親御さんと

相談したいので、ご一緒に来てください」と。SEXすると妊娠することは知っていたが、まさか自分になるとは思っていなかった。彼に相談しようと思ったが、家庭が複雑なためやめた。私の家は母親は癌で入院中。兄は外に出ていて、たまにしか帰宅しない。父親は技術者でお酒が大好き。調子の悪い時は暴力的になるので関わりたくない。

(後日、某相談所で契約カウンセリングを始めたとの報告あり)

DV相談の“急増”と“かくれ減少”が起きている？

国連が4月にまとめた報告書は、各国で外出制限が始まってから家庭内での暴力が急増している実態を示した。DV報告数の増加率(外出制限後)は、フランス：30%増、アルゼンチン：25%増、シンガポール：33%増。このほか、アメリカ、カナダ、ドイツ、スペイン、イギリスなどでも被害の拡大が確認されている。

一方外出制限によるストレスから、暴力が増えるだけでなく、加害者が常にそばにいたために被害者が相談窓口にアクセスすることもできないという、いわば“二重苦”の状態になっていると思われ、本当の被害はもっと多いという。

日本では、厚生労働省の4月10日の事務連絡の「新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言等を踏まえた支援対象児童等への対応について」は、外出自粛の中で「今後、生活不安やストレスによるDV被害等の増加も懸念」とされると述べ「支援が必要な子どもや家庭に適切に対応」するよう要請。相談業務の拡充や各関係機関などの連携強化などを求めている。

5月22日の朝日新聞では、「経済不安で夫が暴力」DV相談3割増、コロナ影響かと全国の配偶者暴力相談支援センターに4月に寄せられた相談件数は1万3,272件(速報値)で、前年同月より約3割増えたと報じている。

【特集】 コロナ禍で想うこと

暮らしに関して

マスクのことなど・・・

角本 典子 80代 豊中市

高齢者は重症化しやすいと聞くコロナ。90
まぢかと 87歳の老老夫婦は感染防止策に意
を用い生活しているのに、突然



マスク難民に。日頃マスクを用
いる習慣なく、メトロ内での非難の視線に凍
りついたが、マスク払底で購入もできず、不
安を仲間に話したら、リュックからサッと差
し出した方、また速達で送って下さる方あり、
活動を共にする仲間の温情が身に沁み涙が出
た。全戸配布の例のアベノマスク2枚は遙か
後に届いた。



離れ住む在職中の娘からもマ
スクが届き、毎日のように「不要不急の外出
禁止」とメールが来てその心遣いに感謝した
が、「お母さんたち、施設に入っていてくれ
たらよかったのに・・・」と心配の余り？か、思
いもかけない酷いアッパーカットを受けた。老

夫婦二人で在宅生活を終生続けられることを
願って努力しているのに「親ごろ子知らず」
の現代版と言うか、それを打ち砕く心ない思
いやり。子ども世代と当事者の親との終末に
対する思いの格差に愕然とさせられた。

年金生活者が被ったコロナ被害はそこそこ
のものであるが、医療・介護に従事する人々
の抱える苦難は思っても余りある。

また、倒産、解雇、閉店などに追い込まれ
る人々とその家族に生ずる生活難、DV など
の問題を考えると、毎日の感染者増の情報に
居ても立っても居られない想いに駆られる。
コロナ対策 57兆円と聞いているが、本当にく
らしの切実な人に確実に給付金が届いている
か疑問も大きい。一日も早いコロナの終息を
願っている。

新型コロナ禍で思う ある図書館で

会員 80代 東大阪市

いつもはインターネットで予約して、近く
へ来る移動図書館で書籍類を借りていますが、
5月半ば、丁度用事が早く済んだので、新し
く建った図書館を訪ねました。

ガラス張りの入り口を入ると、マスク着用、
手指消毒、ソーシャルディスタンスの協力お
願いのステッカーシール、消毒液が置いてあ
り、広い明るいフロアにも消毒液、受付は透
明なシートで囲われ、本の除菌ボックスも置
かれていました。「一度手に取られた本は本棚

に戻さず、ラックにおいて下さい。後ほど除
菌致します」の表示や「お願いのステッカー
シール」はあちこちに…。

4人掛けの机は斜めに2人掛け、「長時間の
滞在はご遠慮下さい」とアナウンスが流れま
す。ゆったり読書の時間を楽しむ気分にはな
れず、早々に本を借りて帰宅しました。

この猛暑！感染者増加の数字を見ると、気
持ちが落ち込み、何も手につかず、ぼーっ
として、あっという間に一日が終わる毎日です。

人とのつながりは、生きる力

山田 芳子 90代 茨木市

◆90歳で、初めての経験

今の「新型コロナウイルス」、がマスコミに取り沙汰されるようになってから、数か月が過ぎようとしている。4月はじめ、大阪に緊急事態の発令があつてから、はじめは軽い気持ちでうけとめたが、新聞・テレビでの報道が深刻になるにつれ、外出時のマスクの着用など、老人には堪えはじめた。

90歳を過ぎ、生まれて初めての経験で、テレビの伝えるニュースは恐ろしく外出もななく怖くて、家から出ない日が続くと、気持ちまでいじけて、新聞をみるのも怖いというようになるのが、我ながらおかしい。

◆友人たちの心遣いが身に沁みた

世間の人は、みんな生活のために「コロナ」ごときにおじけしないで子供を育て、子供たちは毎日、集団登校で学校へ行く。その姿をみると、やっと落ち着いた。みんなこうして暮らしを守っているのに、いかに用なき老人とはいへ、日々、することはしないと、生きる甲斐がない……と思い直したとき、大阪から高齢者の会の友達が訪ねてきてくれた。なんと、老舗の料理屋さんのお弁当付きで、コロナ騒ぎで落ち込んでいるだろうと、心配しての訪問だった。若い人の話は活気に満ちてい

るし、話は楽しく私にとってはビタミン注射のような数時間だった。わざわざ車で駆けつけてくれたのだ。

それから数日して、向かいの2階に住むBさんから電話があつた。「暫らくお顔を見ないけど、お元気ですか？ でも、お部屋の電気が点いてるから、元気だと思うけれど……」というBさんの優しい声が聞こえて、私はふっと心が和んだ。涙が出そうになった。

コロナで閉塞状況のようなときでも、私が元気かどうか、関心を持ってくれる人がいらっしやる。Bさんの家は2階だから、1階の私の家は、北にあるし、南側からみたら、電気が点いているということは、確認できるのだ。お互いに訪ねあうことは、遠慮しなくてはならないが、こんな時だからこそ、ひとり暮らしの老人を見守ってくれている……ということ私にはひしひしと感じた。

◆人とのつながりは生きる力

人と人のつながりさえあれば、困難にも負けず、人は生きていける。車でかけつけてくれた大阪の友達といい、灯りがついているかどうか、気にかけてくれるBさんといい、落ち込んでる私に明るい希望となって、勇気を与えてくれた。

ある光景から

古田 洋子 80代 兵庫県川西市

4月に発出された、新型コロナウイルスの感染症対策のための緊急事態宣言が解除された6月のはじめ、県境を越えて大阪府の友人宅を訪問した。紫陽花が盛りだという庭を見せてもらうためである。最寄りの大阪モノレールの或る駅で降車した。改札に向かう。長

いコンコースには、休憩スペースが設けられている。窓に沿って、長いカウンターテーブルがしつらえてあり、間隔を置いて椅子が置かれている。そのテーブルに、窓に向かって、白シャツ、紺ズボンというサラリーマン風の若い男性が座っていた。テーブルの上には

パソコンが広げてあって、窓の枠の柱に取り付けられているコンセントに繋がっているらしい。テレワークだ。

在宅勤務中の彼は、ここまで出勤してきて仕事をしているのだ。改札口で駅員にたしかめる。柱には、コンセントやUSBポートなどが埋め込まれており、無線LANも利用できる。ビジネスユースに対応しているのだという。

帰路、4時過ぎ。同じコンコースを通る。一人増えている。朝来ていた人はまだいる。自動販売機の飲み物とスナックで、お昼にしたのか。

コロナ感染防止のため、オンラインを利用しての、在宅ワークが推奨され、実行された。わざわざ出社しなくても良い、合間には子供と公園に行ける、家事分担が可能など、新しい働き方に関心が集まっている。かたや、住

宅環境の不備、エアコンなどの光熱費の膨張、一日在宅されると家族はうっとうしいなどという声もある。

自宅が仕事の場になるというビジネス形態にあって、自宅からちょっと離れた場所に仕事のできる場所があり、そこへ出勤していくという働き方があった。それが可能となるインフラを提供したこのモノレール会社のように、ビジネススポットは、ますます増えていくことだろう。

今、「緊急事態『再宣言』はありうる」と言われている。経済活動のさらなる悪化により倒産、雇用の喪失などが起きるのは必至だ。働き方も大きく変わってくることだろう。働く人々が、どのような形であれ対応策を見つけ出し、この揺れている社会を立て直す大きな力になってほしい。

“巣ごもり”で省察の日々

松浦 恵子 70代 大阪市

1月に国内初の新型コロナウイルス感染者が確認され、4月7日に発出された緊急事態宣言が5月25日に全面解除された。とはいえ第2波と思われる感染者数の増大に緊迫した状況が続いている。

後期高齢者の夫と2人暮らしで、病気の百貨店の夫が感染すれば即アウトなので遠出は控えているが、この間、手帳の予定がすべてキャンセルに。特に美術館（不要不急にあたるが、私の日常には必要不可欠なもの）の閉館、各種演奏会（来年に延期になったチケットはまだ手許に…）の中止で、「自由でいられることは幸せなのだ」と実感した。他はいつもと何ら変わりなく暮らしている。

エッセンシャルワークの人たちの緊張感を想うと申し訳ない気持ちになるが、私は“閉じこもり”が向いているらしく、積読だった本を読み、画集を眺め、掃除で身体を動かし、

生活の断捨離（捨てるはずの20年前のシャツとスカートでワンピースを作ってこの夏愛用）に精を出し、感染者数に一喜一憂する毎日が続いている。体力の低下とともに生活の活動範囲が狭くなる超高齢期になったらこんな暮らしなのだろう。すでにデジタル弱者ではあるが、今後はICTに対応できるよう一往の努力は必要だと感じた。

時間が十分にあるので、新聞を隅々まで丁寧に読み、TVだけではなく他の情報を得て、「個人の尊重」と「集団の中の一人」について考えてみた。最近、“自粛警察”や“夜の街”など差別の氾濫が目立つようになったが、「差別」と「偏見」から同調圧力で思考停止につながるのではと少し心配だ。私自身の内側を見てみると、寛容さはあるか、公正さに対して陰の部分を認めることができるかを考えさせられ、流されずに真実を見極める知性と理

性を持ちたいと思った。

また、「GO TO トラベルの推進」と「帰省の自粛」は矛盾する——どうすればいいのか答えが欲しいとの声もあるが、溢れる情報を、まず疑いながら整理、断捨離し、何が必要か、大切かは最終的には主体性を持って自分で考

え判断するしかないと思う。

この夏、懸命に咲いた紫陽花の終り時に、色は褪せてもまた一味違う、蠟細工のようなその美しさに心奪われた。これからのわたしの人生も、このように在りたいと思いながら一日も早いコロナ禍の収束を願っている。

「今日行くところ」を取り戻したい

吉年 千寿子 70代 富田林市

◆生活が一変

2 月下旬から新型コロナウイルス感染がじわじわと拡大し始め、3 月 2 日からは学校の一斉休校が始まり、4 月 7 日に緊急事態宣言が出され、不要不急の行動自粛が要請されることによって、これまで日常だった生活が一変した。

まず、市議会議員として 20 年間来賓出席してきた小中学校幼稚園の卒業式や入学式に出られなくなったことを初め、全てのイベントが無くなり、今日行くところがなくなった。4 月初めに発行予定の「議員活動報告」を見合わせるにより、1 回のポステイングに要する 140 時間が浮いた。ボランティア活動も中止になり、市役所の職員と会うことにも遠慮がいるようになった。

◆落ち着かない日々、マスク作りに励む

家に居る時間が急に多くなって、何でもできるはずなのに、自分のためだけに時間を使うのが落ち着かず、本を読む気力もわかない、書類の整理や家の中の雑用などにも集中できなかった。その時に救われたのが電気店で欲しくなって買った 1 台の卓上ミシンだった。

マスクなしでは買い物にも行けない必需品でありながらどこにも売っていない、一方で、町に溢れる白いマスクにウンザリする気持ちから、百均のバンダナや手ぬぐい、自宅にあ

った晒や端切れで楽しみながらマスクを作り始めた。居間がミシン工房になって 5 ヶ月、毎日ポステイングした時間を記録する代わりに、作ったマスクの数をカレンダーに記録するようになって、もうすぐ 500 個に達する。身近な人に会う時に渡したり、遠くの親戚や友人たちにレターパックで送ったりして、ご機嫌伺いのツールの役目を果たしてくれている。私もそのおかげで十分気力を充電できたと思う。

コロナ感染拡大はまた深刻になってきているが、基本は徹底的な手洗いと消毒、マスクの着用、三密予防対策である。今年の冬は人々がコロナ感染予防に努めたが故に、インフルエンザ感染による死亡者が激減したとの報告もある。

◆今日行くところを取り戻したい

看護や介護・保育などのケアでは人との身体の密着は避けられない。人とのコミュニケーションも基本は会うこと、会って話すことである。電話や手紙、SNS による通信もそれを補完する手段にはなる。

しかし、いつまでも人と会うことを避けてはいられない以上、感染予防の対策を講じた上で、顔を合わせることを恐れずに、今日行くところを取り戻していてもいいのではないかと思う。

コロナ禍ではこんな側面も・・・

会員 70代 大阪市

◆「きょういく」と「きょうよう」？

同い年（76歳）の老夫婦ふたり暮らし。夫は毎日、徒歩5分の会社に出社。私もその会社に関わり、また市民グループの事務局の仕事もあるので、高齢者が元気で暮らすキーワードと云われる「きょういく＝今日行くところがある」と「きょうよう＝今日する用事がある」を二人とも地でいくような生活。

コロナ禍で、会社はテレワークや時差出勤、飛沫防止ボードの設置、マスクや消毒液の手配、社内の清掃・消毒、感染者を出した時のための対応等々、様々余分な仕事が増えた。

また社員の1/3がテレワークとなって、全社員が一同に会する機会が減り、社内外の食事会や飲み会も激減。コミュニケーションにささか支障が出るのは仕方がないこと、と何よりも社員の健康管理に努めた。

◆嬉しかった息子の心遣い

「しっかり食べて、しっかり寝る」がモットーの、夫と私の個人的な生活はコロナ禍でも劇的に変わることはない。また息子たちは自分のことで精いっぱい、親の気質と生活ぶりをよく知っており、心配はかけていないと思っていた。ところが先日、首都圏在住の長男からラインが入り、墓参の写真が添付してあった。「えっ！大阪まで来てたん？ 会いたかった・・・」とびっくりして電話をすると、「京都に出張したので序でにお墓参りに行った。

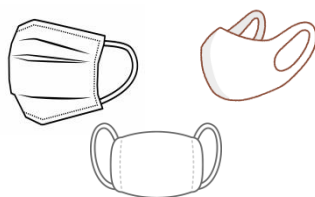
今は、おふくろ達には会わんほうがいいと思った。この間 zoom で元気そうな顔見て話したことやし・・・」とのこと。基礎疾患もちで後期高齢者の母を気遣ってくれてるんや・・・と嬉しく思った。

誰かのことを思い遣る、この人間的な営みこそが、人と人を優しく繋ぎ、生きる意欲につながるのだと実感。してもらって嬉しいことは実践しよう！

◆新しいことにチャレンジ！

お節介やきの私にできることとして、会いたくても会えない恩師や大先輩に zoom でのオンライン・テレビ通話を提案、家人にお願いしてパソコンの環境を整えて貰い、お互いの顔を見ながら何度も話した。90歳・90歳・76歳の「三婆婆」のオンラインテレビ通話。画面に映ることを少し意識し、それぞれに身だしなみを整えての参加。ステイホームで外出の機会が減ったいま、それも大切なことの一つ。いくつになっても未知の分野にチャレンジすれば、新しい扉が開くことを実感した。

隔離病棟の扉の向こうで新型コロナウイルスで亡くなられたり、大変な思いをされた方々には心苦しく、また、必死で治療や介護にあたっておられる医療従事者やケアワーカーの方たちには感謝と敬意を表しつつ、コロナ禍ではこんな側面もあったことを記録しておきたいと思う。



コロナ禍の中で

瀬能 邦子 80 代 柏原市

「亭主達者で留守がいい」を卒業して、「婆さん達者で留守がいい」に姿を変えた我が家の平和憲法は、バアサンが独りになり、コロナのお陰で威力半減です。

娘どもがあきれ返りつつも感心するカレンダーの書き込み、×印が続く数ヶ月です。リモート会議やらにも追いつけず、恐る恐る出かけた集会もマスク越しのやり取りに疲れます。

「元気してる?」「ご飯ちゃんと食べてる?」「水分しっかり摂ってる?」「夜更かしはダメよ」の声掛けが頼りの日々です。

断捨離にも疲れて、「小人閑居して不全を為す」のわが身に目をつぶりながら、コロナ禍

で見えてきた世の中の「不善」の数々を、しっかり目に耳に胸に刻み付け、「達者で留守がいい」バアサン復活に向けて我流のストレッチ体操に励みます。

5 月下旬から再開された、グループホームの外部評価（訪問）、どのホームも家族などの面会お断りの中、利用者の皆さんの笑顔に救われます。ボランティアの訪問も外出支援もままならず、「しっかり食べる・しっかり出す・しっかり眠る」の日々の暮らしの安全と安心を護るために、様々な工夫と努力を重ねる現場の職員各位に、「感謝」と「敬意」を捧げます。

コロナウイルスの大阪城

濱本 哲 70 代 和歌山県広川町

電車が入ってきた。きのくに線湯浅の駅に、ただ一人待っている駅に、電車の入線を告げるアナウンスが響く。

「首都圏週末移動自粛」と新聞の一面に大きく載り、新型コロナウイルスの終息が見えない状況で萎縮ムード、スカットとしようと思ひ友達に連絡を取り、私の誕生祝を口実に大阪城に引っ張り込んだ。

遠い昔、まだ日生球場があった頃の、森ノ宮の古い洋食屋さんが、まだ営業してたことに感動して、昼から祝宴上げた。

千鳥足で、「ピース大阪」から公園に入り、自粛により花見が禁止され、それに代わり、学校が休みで行き場のない子が集まっているのか、自転車を巧みに乗り回している子、キャッチボールをしてる子、子供の多さにびっくりをした。

春とは名ばかりの冷たい風がお濠に浮き寝

をしている鴨の上を抜けて天守閣に吸い込まれていった。ソメイヨシノは三分咲き、アーモンドは満開で甘い香りをただよわせていた。

そのあと懐かしい天満橋で、落ち着いた雰囲気飲み屋を見つけ、二階に案内される。ともかく、ビールを頼み乾杯する、今日二回目だ。

「焼酎の美味しさはロック」と教えてくれた飲み友と三回目の乾杯をした。

40 年前によく飲んだ天満橋界隈の雰囲気が一気に昔に引きずり込んだ。コロナウイルスの閉塞感と似た時代、遠くの世界と思っていたオイルショックが身近な世界にびっくりした「トイレトペーパー騒ぎ」を思い出す。昔話に大阪城の満開のアーモンド以上の花を咲かせた夕刊に「都道府県に緊急事態宣言発令」と一面に大きく載った。

帰りの電車の窓に酔い顔が浮かび、「グロー

バル化」「保健所・感染症病院の縮小など、経済を最優先させる国策」など、久し振りに議論した断片が頭をかすめ、いままでの非日

常が日常になりそうな空気に身震いをした。電車は山中溪で動物と接触したため停車、何故か、このまま止まれば良いと思った。

コロナ禍で想う

会員 80代 大阪市

◆人と会うのが大好きな私、でも……

再びコロナ感染者が激増する中、私はまさに「要注意」の80代、持病持ちの高齢者です。人と会うのが大好きな私は、2月まで月に10日は電車で出かけ、5日は地域の活動に参加していました。3月に入って「自粛」により殆どの会合が中止になりました。でもほぼ半年経った現在、倉敷に住む娘とも正月休み以来会えない等、寂しくもの足りないけれど特にストレスを感じずに過ごせています。「何故？」と考えると、これまでの「日課」(ルーティン)の継続に思い当たりました。起床から就寝まで毎日の家事もほぼ時間が決まっています。外出していた時間はこれまで怠けていた「終活」をぼちぼちしたり、会えない人に便りと、そして一寸は読書もします。

◆40年続けている仕事が、私の支え

会合のための時間に追われることもなく、更に今も平時と全く変わらず40年近く続けている小さな診療所の医療事務(非常勤)があります。休業のないこの仕事は勿論緊張が続きますが、私の心身を支えてくれていることを感じます。以前は勤務と重なり行きたい会合もパスしたり、年を重ねてのミスを恐れたり何度ももう辞めたいと思いましたが、今は続けていてよかったと思います。

もうひとつは娘と2人暮らしの効果です。叱られてばかりですが、独居の友人が多い中で、会話の絶えない日々感謝です。現況の中で「ステイホーム」による高齢者の心身の衰えが問題になっています。

◆地域の高齢者のことが気がかり

私の関わる「老人会」では独居で94歳のメンバーが心配です。彼女は好奇心いっぱい、自分で体力的に無理と判断したこと以外は、地域の行事に積極的に参加して来られました。80歳からフラダンスを習われた方です。しかし地域の集い、特にお気に入りの「100歳体操」が中止されてからの彼女の心身の落ち込みは想像以上です。外出出来ず、人と会話出来ないことの影響の大きさをつくづく感じています。彼女を初め独居の方への電話を心がけていますが、とても補えません。「3密」を避け、マスク、手洗い、うがいは高齢者も即実行出来ますが、AI特に「キャッシュレス」のお勧めはどうでしょうか？コロナ禍を機に加速するAI化について行けない者が大勢いることを心に留めてほしいと思います。平常は考えもしなかった数々の問題を前に、今は先の見えない不安の中にいますが、多様な経験が生かされる日が近いことを願って、前向きに日々を過ごしたいものです。

その時、事務局は・・・

田代 眞朱子 70 代 大阪市

◆2020 年度の総会準備の真っ只中

2020 年 4 月 7 日、大阪に緊急事態宣言が発出され、活動の拠点であるドーンセンターが閉館、5 月 19 日に一部再開されるまでの間、集合型の会議が開けなくなった。

(6/2 全館再開)

その頃、事務局は 2020 年度の定時総会に向けて準備の真っ只中。総会や午後の講演会のことなど、運営委員会で決めなければならない事が多々あり、委員と個別のメールの遣り取りを繰り返すまどろっこしい日々だった。結果として、会員の皆さまには、書面議決ハガキで総会の議案の可否を返信して頂き、全ての議案が決議され、新役員体制がスタートして現在に至っている。

◆オンライン会議に挑戦！

このコロナ非常時、集合型の会議の再開を座して待っていても埒があかないと考えた私は、ZOOM でのオンライン会議を呼びかけることにした。とはいえ、70～80 代が多い女性ばかりのメンバー、そんなことが現実問題可能なのか、と訝りながらも、そこは生来のチャレンジ精神で、「できない理由を考える前に、まずはやってみよう！」と思った。

私は、パソコン歴は長いが ZOOM は初心者。オンライン会議を呼び掛けるにあたり、まず私自身が ZOOM のセミナーを受講。コロナ禍でステイホームのとき、居ながらにして著名な講師のオンラインセミナーを受けることができるという僥倖。若い人に交じって受講した。そして受講後、まずはパソコンを使いこなしている（と思える）副代表二人に声をかけ、3 人で「お試し」オンライン会議にチャレンジしてみた。これが思いのほかスムーズに行き、聞きつけて、やってみたいというメンバー続出。個別に「お試し」を進め、さあ、

これでいつでもオンライン会議ができる！と準備が整ったところで、あららっ！ 非常事態が解除され、ドーンセンターも利用可能になった。そんな訳で、「お試し」だけで実際には役員や運営委員とのオンライン会議を開催してはいないが、第 2 波・3 波に備えて準備万端怠らずといったところだ。

◆会報の編集会議もオンラインで

また、会報を作成している広報部のメンバーでもある私は、集合型の編集会議ができなくても、オンライン編集会議をして会報の発行ができるよう試行錯誤しているところ。

高齢者といえども、社会の変化に遅れまじと挑戦すれば、新しい扉が開く事をコロナ禍は教えてくれた。

◆歴史に学ぶ

ステイホームで読んだ歴史本に、「コレラやペスト、スペイン風邪など、人類を襲ったパンデミックは、人類の叡智により終息してきた。そして感染症とたたかった後には、『ルネサンス』等、必ず大きな変革があった」と書かれていた。

また、「人類の敵は人類なのではなく、パンデミック、火山の大噴火、地震・大津波などの自然災害である」とも。

改めて謙虚に歴史に学び、新型コロナウイルスを正しく恐れ、しっかり自分の頭で考えて行動しなければと思う。

それにしても、アフターコロナの世界ってどんなだろう・・・？ 国を挙げてデジタル化が進むことは間違いないと思うが、縦割り省庁を越えてのデジタル化でない意味がない。旧弊を打破し、チャレンジすることができるのか？ コロナ禍の今、いろんな場面で私たち一人ひとりも問われている。

アフターコロナをどう生きる？

市民社会と情報 ～主体性・独自性を持って判断するには～



講演会は、感染予防のため、入り口で消毒・検温を済ませ、全員マスク着用で開催された

講演：前川喜平さん（現代教育行政研究会代表）

れる。「自由であること」はつらく、しんどいことであるが、権威主義を排除し主体的に生きることにつながる。

ついで、「一斉休校」のもたらしたものは何かとの視点で持論を展開された。2月27日の全国一斉休校は、文部科学省も知らないうちに首相が発表することで公になった。その後、28日に文科省が休校要請を発出したが、本来文科省には「一斉休校」を指示する権限は持ちえない。それにも関わらず、3月4日以降、全国で99%の学校が、各地教育委員会の決定・指示により休校に応じた。当面2週間の休校が4月以降も継続され5月末までに及んだ。

首相は「一斉休校」の理由を、「子どもたちの健康と安全のため」としていたが、それは、科学的根拠はなく、効果はなかった。

学校が感染発震源になる可能性は低い。むしろ、休校にすることで多くの弊害を生んだ。その弊害の一つとして、家庭の学校化が生じ親の負担が増した一方で学習格差が拡大した。そして、長時間のゲーム操作によるスマホ依存等、子どもの心身への影響が大きくなった。

また、学校給食が食べられず栄養不足の子どもが増加した、一方、休校により虐待が外から見えにくくなった、すなわち学校や病院に行かないので「見つからなくなった」ことは罪深いことだ。今、まさに“社会全体で子どもや家庭を支える”ことが求められる。一国主義・排外主義が拡大している世界の状態では、コロナのパンデミックは収められない。

今回の講演を拝聴し、「事実」を見極めるのは「自分」であり、感性を研ぎ澄まして氾濫する情報の「真偽」を見極める能力の必要性を実感した。
(山中 理恵子)

冒頭、「新型コロナはまさしく未知との遭遇であり、その実態や適格な対処方法は誰も知らないものである」との前提から、本日は「科学的な視点を持ち、自ら考え、自ら判断すること」がいかに重要かについて講演する旨の説明があった。

最初に、現在の情報過多の現状下であって、多くの人々は「コロナに対する情報の何を信じていいのか」全く分からない状況に置かれている。国や自治体からのメッセージは、①帰省は控える、②帰省するときは気をつけろ、③GO TO キャンペーンは継続する、等である。それらは、各地方の首長から微妙に変化した個別メッセージとして発出されている。加えて、その指示には科学的根拠の無いものもある。「官僚も“嘘をつく” — 本当のことは言わない」ことを認識しておこう。特に安倍政権下の官僚は、官邸の言うままになっていることは周知の事実だ。そのうえで、「専門家といわれる人々の発言もまちまちである。中でも、政府関係専門家は、政府に忖度する御用学者が抜擢される」のが現実である。従って、「自分を信じて、自分の主体性で判断するしかない」ことが正しい考え方だ。情報を見分けることは、すなわち人を見分けることだと言える。そして、信じられるのは、「他の事態でも科学的（「事実」と「論理」で考える）に論じている」人である。私たちには、他者の言葉を鵜呑みにせず、自らが「自由に判断すること、すなわち主体性の確立が求めら

wabas 大阪 講演会のご案内

◆講演会: 「人生 100 年時代、自分らしく 地域で生を全うする」
～「ホームホスピス」って、どんなの?～」

❖と き: 2020 年 11 月 14 日 (土) 13:30～16:00

❖講 師: 東田 敦子 さん (特定非営利活動法人 ホームホスピスふさの家 代表)
松澤 ミサホ さん (特定非営利活動法人 風の栞 代表)

❖ところ: ドーンセンター 4F 大会議室① (定員 72 名 申込順)

❖申込先: 高齢社会をよくなる女性の会・大阪 事務局

❖参加費: 会員 500 円 非会員 1,000 円 (コロナ関連で定員半減の場合あり)

【運営委員会だより】

【第 5 回運営委員会】 2020 年 7 月 11 日 (土) ドーンセンター

①会報第 107 号発送予定(7/22) ②会報第 108 号コロナ禍特集「新型コロナウイルス禍で想うこと」の原稿募集(8/15 締切) ③介護問題研究会、シニアライフ・サポート倶楽部合同勉強会: 堤修三さん講演「介護保険制度は持続可能?～コロナ禍と介護を考える～」(大阪市中央公会堂 9/14) ④「団塊世代へのヒアリング調査」(介護問題研究会担当)参加予定の会員のボランティア保険料は本会計から支出

【第 6 回運営委員会】 2020 年 8 月 8 日 (土) ドーンセンター

①国際女性年大阪連絡会 8・7 平和集会: 前川喜平さん講演「市民社会と情報」9 名参加 ②会報 108 号は増ページのため印刷業者を検討 ③10 月の全国大会は中止

運営委員会日程

10 月 17 日 (土)
11 月 14 日 (土)
12 月 12 日 (土)

運営委員会は原則として
毎月第 2 土曜日の
午前 10 時～12 時
ドーンセンターの
中会議室他で開催

※会員はオブザーバー(議決権はない)として
いつでも運営委員会に参加していただけます。
運営委員会って、どんな事をしてるの?
興味のある方は、ぜひ見学にいらして下さい。
お待ちしております。

NPO 法人 高齢社会をよくなる女性の会
「第 39 回全国大会 in 東京 (10/10・11) は
コロナ禍のため、中止 になりました。」

◆ご寄附いただきました (敬称略)

榊原 伊都子 匿名 (1 名)

会費・賛助金ご協力をお願い

- ◆ 年会費(4,000 円) 未納の方に振替郵便用紙を同封いたしております。行き違いのありました時はご容赦下さい。
- ◆ 会員及び会員外からも活動賛助金 1 口 5,000 円をお受けしております。(会則 7 条) ご協力ください。
- ◆ 郵便振替口座 00980-1-17848 高齢社会をよくなる女性の会・大阪
- ◆ 郵便貯金口座 ゆうちょ銀行 ○九九店 当座預金 17848 受取人名 コウレイシヤカイフヨクスル ジョセイノカイ オオサカ

編集後記

新型コロナウイルスと酷暑と豪雨・洪水の連続したこの夏。安倍首相のまさかの辞意表明と新内閣発足。日本の行く末の不安定さが案じられる昨今。「コロナ禍で想うこと」特集号を皆さまにお届けします。投稿者 25 人の幅広い意見をどんな風にお感じになったでしょう。コロナに対してむやみに不安を抱くことなく、情報の収集とそれを適正に判断し行動する力をもつて、「正しく恐れる」ことが大切だと思っております。さらに会員の皆さまからの感想やご意見を事務局へお届けくださるば、私たちの活動をより豊かなものにできるでしょう。お待ちしております。(角本典子)